

説教 『振り向いたまなざし』山本護 牧師
聖書 箴言 24:16/ルカによる福音書 22:54~62

「神に従う人は七度倒れても起き上がる。神に逆らう者は災難に遭えばつまずく(箴言 24:16)」。日本流に言えば「七転び八起き」か。ただ箴言の「七倒れ」は相当な敗北を暗示させ、浪花節調のどことなく明るい「七転び」とは違う。ペトロは師を「三度知らない」と否む(ルカ 22:57~60)、「外に出て、激しく泣いた(22:62)」。また正しい告白(マルコ 8:29)をした直後にイエスからこっぴどく叱られ(8:33)、教会の堂々たる指導者(使徒 2:14~42)となった後も、末席のパウロに面罵された(ガラテヤ 2:14)。同じ著者によるルカ福音書と使徒言行録には、「七度倒れても起き上がる」ペトロが具体的に描かれている。

イエスが連行された屋敷の中庭、多くの者が火を囲んで座っていた(ルカ 22:55)。深夜の不気味な沈黙、焚火の光が男たちの無表情な顔を闇に浮かびあがらせている。群衆に紛れて火にあたるペトロを、女中が見咎めて言った。「この人、あの男といっしょにいやはったわ(22:56 山浦訳)」。その場が不吉にざわめき、ペトロはこれを否む(22:57)。しばらくして別の者が彼を見て、「うん、お前もあのもの仲間の一人やな」と言うと、ペトロは「友オ、そんななごどアあり得ねア」と否む(22:58)。男たちの目がざらり殺気立つ。女中の疑いの目、告発者のいたぶる目、男たちの血走った目に焚火がめらめらと映る。こうした、数多のおぞましい視線を受けながら、ペトロはみるみる不安の淵に沈められていく。

ガラヤヤ訛りを訝しんでいた男がペトロの正体を見抜き、「ああ、確かにこの男はあの野郎と一緒にいたわ。なんでやちゅうと、そもそもこいつはガラヤヤもんやさかいな(22:59)」と念を押すと、男たちは棍棒や鳶口をぎゅっと握る。するとペトロは「友オ、おめアさんがかだってるごどろア俺にアかいもぐ見当もつかねア(22:60)」と答えて馬脚はいっそう露わになる。おろおろ弁解している間に「突然鶏が鳴いた」。憎悪の目と、悪意の耳と、自分の惨めさでがんじからめになった孤独なペトロ。しかし彼は、恐れに沈められたそのただ中で、深く、力強く、涼しい、不可思議なまなざしを受ける。

「主は振り向いてペトロを見つめられた(22:61)」。このまなざしの前に、もう隠すものも、強がるものも、みっともなさも、誇るものも、無い。すべてが受容され、すべて赦されている。誰もが「作った自画像」をもち、他者にだけでなく、自分にも見せつけている。イエスは振り向き、自画像の陰に隠れた「私」を見つめ、静かに微笑み、再びうなだれた。とは、言い過ぎだろうか。その表情はまったく伝えられていないので勝手に思い浮かべる。ヘブライ人や中近東のものではない、野道の傍らの古いお地蔵さんを。荘厳しない僧形で「人間の地獄」におられる地蔵菩薩。ペトロも孤独に沈められたが、イエスはさらに低い所から人間を見通し、愛し、赦し、私たちを解き放つ。東アジアに生きる私にとっては、振り向いたイエスの表情と(22:61)、お顔を風雪に削られた石の地蔵さんが重なる。

「神に従う人は七度倒れても起き上がる(箴言 24:16)」。キリストのまなざしが倒れた者を幾度でも起き上がらせる。危機や死に陥っても、このまなざしを受ける所には光が生ずる。高みから鷹揚に見ているのではない。下から、常に下からのまなざし。これを礎と踏んで私たちは起き上がる(復活)。



【おまけのひとこと】

キリストの振り返りは叱責(マルコ 8:33) 赦し(ルカ 22:61) つまり転換 まなざしは闇の一面を照らし 闇の縄目は解かれる 放たれた者は歩き出す どこへか 小さな光を灯し いっそう深い闇の中へ